

白百合の崖^{きし}

山川登美子・歌と恋

津村節子



新潮社版

白百合の崖

山川登美子・歌と恋

津村節子

新潮社版

しろり
白百合の崖——山川登美子——
歌と恋

昭和五十八年五月二十五日発行
昭和五十八年七月三十日二刷

著者 津村節子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷 株式会社金羊社

製本 加藤製本株式会社

定価 一一〇〇円



© Setsuko Tsumura 1983 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN4-10-314705-9 C0093

白百合の崖^{きし}
—山川登美子・歌と恋—

閉め切った部屋の中には、空気が重く淀んでいた。

盗汗をかいたらしく、寝衣が濡れている。雨戸の隙間から射し込んでゐる光で、もう陽が高いことが察せられた。

登美子は、軀を蒲団から引き剥がすようにして起き上り、雨戸を開けた。冷えた外気が流れ込んできた。

登美子は深々と呼吸した。左の胸にかすかな痛みを感じられた。近頃、時々こんなことがある。近くの家の物干場で、女が洗濯物を干しているのが、屋根越しに見える。白い割烹着をつけた、登美子と同年輩ぐらいの女だ。恐らくその家の主婦なのだろう。

もう朝食を終え、後片付けも済ませてしまったのだろうか。

竿に干した洗濯物を、両手で叩きながら皺を伸ばしている。勢いのいいその音も聞えてきて、登美子は健康そうな女の様子をまばゆい思いで見ている。

一箇月ほど前から、氣力のない日が続いている。夏からの疲労が今頃になって出てきたのであ

ろう、と登美子は氣にかけずにいた。というより、氣にかけまいとしていた。

夏休みに郷里の小浜へ帰った時に、家人に顔色が悪いと言われたが、帰省の途中石山寺や義仲寺を廻ったりしてきたので、旅疲れだと言ひ、自分もそう思っていた。

九月からの新学期に間に合うように東京へ戻つてからは、日本女子大恒例の秋季体育大会の準備や練習に追われ、軀をいとう暇もなかった。

秋も深まり、友人たちは落着いて勉強に向ひ始めている。しかし、登美子の体調は思わしくなく、午後から夕方にかけて顔が火照り、軀が熱っぽく感じられる。軽い咳が出るので、風邪をひいたのだろう、と思つたが、故意に体温計をはさむことはしなかった。

その日、明治三十八年十月二十三日に、日露戦争凱旋の艦艇二百隻が東京湾に集結する大観艦式が行われるということを、登美子は同郷の土田数雄少尉から聞いていた。土田は横須賀碇泊の軍艦橋立に乗っている。

行ってみようか――。

観艦式にも、土田にも、さして関心があつたわけではない。昨日までは行く氣もなかったのだが、近頃何をしてても意欲というものが薄れているのが不安で、出掛けなければ今日も一日無意味に過してしまいそうな氣がしたのだ。

登美子は、鏡台に向つて、髪を梳つた。

少し痩せたのだろうか。両頬が丸みを失ひ、頬骨が出てきたような氣がして、鏡に顔を近づけてみる。ひどく蒼くて、皮膚の艶もない。

小浜の女が色白で肌理が細かいのは、少し掘ると町中どこでも湧き出る清水で顔を洗うからだ

と言われており、登美子も元来色白で、薄々した皮膚の下には血の色が透けて見えたものだ。顔色が秀れないのも、痩せたのも、近頃食欲不振で栄養が片寄っているせいなのだろうか。

くせのないたつぷりした黒髪を束髪にまとめ、気に入っている紫の矢絰やぶすりのお召を着て帯をきつめに締めると、軀がしっかりしたような気がした。

「出掛けるの？」

階下へ降りて行くと、弟の亮蔵が声をかけた。登美子は休日の度に、小石川の日本女子大扶桑寮から、弟と三人の甥、山川収蔵、英蔵、河勉三が東京の学校へ通うために借りている牛込矢来町の家に遊びに来て、琴を弾いたり、彼らのために料理を作ったりしていたが、短歌会に出席する時は泊ることもあり、その折は甥収蔵の外泊証明書を持って帰った。収蔵は長兄の長男で、数え年二十七歳の登美子より三歳下、亮蔵は登美子より八歳下である。

「観艦式へ行くんですか」

収蔵が、微笑しながら言った。

「ええ、どんなものか見ておこうと思って」

「それはいい。帰ってから様子を聞かせて下さい」

土田少尉は収蔵の小学校、中学校を通じての友人で、観艦式の誘いも、収蔵を通じて伝えられたのである。

よく晴れた日であった。

秋晴れの日など幾日もないうちに雨を含んだ重い雲が空を覆ってしまい、飽きるほど雨が降り続いて、十一月には氷雨が降り、それが間もなく雪に変わる北陸の長い冬を思うと、晴天の日がこ

の上なく貴重に思われる。こんないい季節に家に籠こもっているのは勿体ない、と登美子は忤こたえない気分を払うように歩き出した。

黒い板塀が長く続いている敷地は酒井邸で、旧酒井若狭守の下屋敷は、矢来町一番地より十一番地にわたる広大な面積を占めていた。亮藏たちが借りている家は、酒井邸庭園だったところで、あざな字名を山里というところから、山里寮と呼ばれていた。

昔、酒井邸は土手を築き、塀を設けずに周囲はすべて矢来を組んでいた。

明暦大火の折に、將軍家綱が酒井邸に避難し、仮に矢来を組んで昼夜警護を固めたことから、以来これを記念するため、塀も垣も造らずに矢来をめぐらし、江戸名物となっていたが、邸内は老樹が鬱蒼と生い茂り、塀越しにもその枝々が道に覆いかぶさっていて日中でも暗く、夜は辻斬や追剝が出没した、と登美子は聞いている。

今も人通りは少ない閑静な一郭で、山里寮は学生が勉強するのに適した環境であった。

山里寮へ帰って来ると気持が安らぐのは、山川家が代々仕えてきた酒井家の旧家臣や縁故の人が寄り集まって住んでいることから、故郷の延長と考えるからだろう。ここへ来れば、懐しい若狭の言葉も耳にすることが出来る。

矢来町は、起伏の多い町である。

登美子は、高みにある神社の境内から見下す展望や、小さな坂を上り下りし、細い道を曲った先にひろがる町の変化が楽しくて、乗物はなるべく使わずに歩くことが多い。

その日も俵を呼ばず、飯田町の停車場までぶらぶら歩くつもりであった。が、足が重く、軀がだるい。外へ出れば気分が晴れるだろう、と思ったのは、体調を軽く考え過ぎたようだった。

熱が出てきているらしく、軀が熱い。

登美子は立ち停つて、ハンカチーフで額を拭つた。全身から力が脱けて、その場にくずおれそうな疲労感があった。観艦式を見に横浜まで行くことなど、到底無理である。

彼女は踵をめぐらして、今来た道を引き返した。

時々足を停め、傍の樹木や塀に手をつけて休みながら漸く家までたどりつくと、張り詰めていた気が一時にゆるんで、玄関の敷台に、倒れるように腰をおろした。

物音を聞きつけて出て来た亮蔵は、赤らんだ顔をして喘いでいる登美子の様子を見て驚き、通いの手伝いのまつを呼んで、床をとるように命じた。亮蔵になかば抱えられるようにして、登美子は二階へ這い上つた。

「姉さん、熱があるんじゃないの」

亮蔵にも、登美子の軀が熱いのが感しられたようだ。

「風邪をひいたのだと思うわ」

登美子は、床の上に倒れ込むように横になった。まつが、気をきかせて持つて来た水枕が気持ちよく、だるい目蓋を閉じると、忽ち深い眠りに落ちた。

夕方、まつが様子を窺いに来た足音で、登美子は目を覚ました。半身を起してみようとしたが、背に錘をつけられたように重く、軀の節々が痛い。

まつが、白粥と梅干を運んできた。何も食べないと力がつかないと思い、漸く二口ばかり食べたが、粥の匂いが胸につかえてそれ以上は食べられない。盆の上に載せられている富山の風邪薬を服むと、登美子は再び横になった。

弟たちは出かけて留守らしく、階下は静かである。まつも、もう帰り支度をしているようであった。

登美子は、床に就いたことで、軀も気持ちすっかり病人になってしまったような気がする。いま、病氣になどなつてはいられない、という焦燥を感じながら、氣力の衰えを自覚しないわけにはいかなかった。

翌日はいくらか熱が下ったようだが、相変らず関節が痛く、食欲もなかった。収蔵が、医師の来診を乞うては、と言ったが、登美子は、単なる風邪だからその必要はない、と言った。しかし、扶桑寮へは、二、三日帰れそうもない。

次の日の朝、学校へ行く支度をした亮蔵がはいつて来た。

「どう、気分は」

「大分いいようだわ」

大分いいというほどではなかったが、いくらか恢復に向っていることは確かだった。

「やっぱり風邪だったんだね。おととい、観艦式に行かれなかったのは、かえって幸いだった。これを見てごらんよ」

亮蔵が、十月二十五日の朝刊を差し出した。

大観艦式のイルミネーション

群衆大混乱

ゴチックの大きな見出しが、登美子の眼を捉えた。

——一昨夕は凱旋各艦、悉くイルミネーションを点ずる筈なれば、之れを観んとするもの鶴見附近の高地二見台、八幡山、麴谷山、潮田、子安、神奈川、高島山一帯の丘陵を始め、横浜戸部、掃部山海軍協会拝観地等に蟬集したり、聴て日没頃浅間艦より盛に煙火を打揚、次で六時頃各艦三々五々点点としてイルミネーションを点じたれど、且つ消え、且つ光て美観を呈するに至らず、見物人孰れも失望の気色なりしが、こは実に各艦互に意匠を凝らして装置せしイルミネーションの試験なりき、斯て七時頃に至るや旗艦敷島は再び火花を打揚ると同時に、各艦は一斉にイルミネーションを点じ、光芒燦爛、海水に映じて美観いふ許りなし、——

それから夜半にかけての進行、経過も詳細に伝えたあと、

——山上の人、海浜の人、一時に帰途に就かんとして人波打つて動揺み立ち、就中前日来横浜に滞在せし数万の拝観人は一度に停車場に押掛け、先を争ふて乗車したれば、同所の混雑名状す可からず——

とその混雑ぶりが報道されている。

数万人もの人々が乗車出来ず、各停車場で群衆の不満が爆発して怪我人も出る騒ぎとなり、積残された人々は提灯を買い、松原伝いに夜行するさまは、狐の行列の如くであつた、ともある。

想像以上の混乱だつたらしい。

「気分が悪くなつて、かえつて幸いだったよ。行っていたら、無事に帰つて来られたかどうかわからなかつた」

亮蔵は、登美子を慰めるように言った。八人同胞きょうだいの末子なのに、時々兄のような口をきくのが、登美子はおかしかった。

扶桑寮に帰ってから、登美子の体調は相変らずはつきりしなかった。軀がだるく、勉強にも身はいらない。食欲もないので、親しい友人たちは心配して、医師の診察を受けることをすめた。

だが、朝起きた時に、目の周囲が腫れぼったく見えるのと、小水の出が悪いような気がするほかは、高熱が出るわけでもなく、さして苦痛があるわけでもない。で、医務室へ行くのは気が進まなかった。なんとなく熱っぽい感じにも馴れたのか、それが平常のようになっていた。

観艦式の日から二週間ほど経った十一月五日、登美子は授業中に突然吐気をおぼえ、手洗いに立とうとしたが、その場に昏倒した。周囲の級友たちが、驚いて登美子を抱き起したが、固く眼を閉じたまま、全身を痙攣けいれんさせている。

ただごとではない様子に、教室中が総立ちになり、医務室へ連絡が走った。

看護婦の手配で、登美子はただちに駿河台の高田病院に入院した。

翌朝、亮蔵が駆けつけて来た時、登美子は浮腫で眼も満足に開かぬほどむくんだ顔をして、ベッドに横たわっていた。亮蔵は異様に面変りした姉に言葉も出ず、その顔を見つめたまま突立っていた。

登美子は亮蔵の驚きを和らげようとして、

「ふとりたい、ふとりたいと思っていたけれど、これではちょっと困るわね」
と微笑を浮べた。

「教室で倒れたんだって？　どういう病気なの？」

亮蔵は、不安そうに訊ねた。

「急性腎臓炎っていうんですって」

「急性っていつても、自覚はあったんだろう？　この間も具合が悪くなったじゃないか」

亮蔵は姉の不摂生を咎めるように言った。観艦式へ行く途中に気分が悪くなった時は風邪のような症状だったし、それは一応癒ったつもりだったが、暫くしていくつかの症状が出ていたのは事実だった。

「急性腎臓炎そのものは、安静にしていれば心配ないのよ。急激な発作が出たので、みなさんに御心配かけてしまったけれど」

登美子は、病室にいる三人の級友たちの方を見やりながら言った。亮蔵は彼女らにまだ挨拶もしていないことに気づき、慌てて、

「姉が大変お世話になりました」と挨拶した。

まだ少年の面ざしを残しているかれの神妙な挨拶に、級友たちは頬をゆるめた。

「院長の高田先生は、私たちの学校の校医さんでいらっしやいますの。とてもよくして下さいますから、御心配はいりませんわ」

「私たちも、交代でお姉さまの御様子をうかがいにまいりますから」

彼女らは動転している亮蔵を安心させようとして、口々に言う。

「うちのほうへも知らせておくよ」

「あんまり大袈裟に書かないようにしてね。こんな顔をしているので驚いたのだからけれど、むくみはすぐひくそうだから」

登美子は、遠い故郷に住む肉親が、登美子の突然の入院の報らに少なからぬ衝撃を受けるだろうことを案じて、念を押した。

登美子自身、急性腎臓炎という病名をつけられて、むしろほっとしていた。登美子の胸の中には、夫の病気に感染しているのではないか、という恐れがひそんでいたのである。

わずか二年の結婚生活を送っただけで夫が胸部疾患のため死去したのは、明治三十五年の十二月、登美子が数え年二十四歳の時であった。

その打撃から立ち直り、二十六歳で日本女子大に入学して、これから自分の人生を歩もうと思っていた矢先に死病にとり憑かれては、せっかく立てた志も無になってしまう。

夏頃から、軽い咳や微熱、盗汗や倦怠感など、結核と疑えば疑える症状があったのを、登美子は風邪や疲れのせいにしていた。故意に医師の診察を受けることを避けていたのは、病名を聞くことを内心恐れていたのだった。

故郷の両親が、登美子の入院と聞いてまず疑うのはそのことだろう。

急性腎臓炎も、病初期に中枢神経障害、心不全や尿毒症を起して死亡する例もあると聞いたが、登美子の場合はその危険は脱していて、あとは安静にして入院加療を受ければ、一月か二月で恢復すると言われた。

入院を必要とする病気にかかったのはやはり打撃であったが、恐れていた病名を冠せられなかったことを、不幸中の幸いと思うより仕方がない。

亮蔵や級友たちが帰ると、登美子はひどく疲れた。無意識ではあったが、元氣そうに見せようという気持が働いていたらしかった。

うとうとしていると、看護婦が検温に来た。

「今日は、何日でしょう」

登美子は、時間の観念が薄れていた。

「十一月六日です」

「すると、昨日は十一月五日ですね」

「ええ、そうですわ」

看護婦は、あたりまえのことを聞く登美子に、笑いながら答えた。

彼女は、看護婦が去ったあと、十一月五日、ともう一度口にしてみた。

突然倒れて病院に運び込まれた昨日は、十一月五日、そして五年前の三十三年十一月五日も、登美子にとって忘れることの出来ない日であった。

その日登美子は、大阪北浜の河家の門を出ると大きく息をついた。

出掛けるまでに突発的な差支えが出来て、出られなくなりはないか、と不安でならなかったのだ。周到な準備はしたものの、どんな障害が起るかわからない。

鉄幹は、十月二十五日山口県の徳山にある妻滝野の実家に行き、帰路関西へ廻ることになっていた。無論その折には、晶子や自分の許へも何らかの報らせがあるだろうと心待ちしていたが、十一月五日に京都の永観堂に紅葉を見に行こう、という連絡がはいったのである。

少し前から、郷里の若狭では、登美子の縁談が進められていた。

母ゑいは、京都の武久家に嫁いでいる三姉みちの家に滞在していて、登美子も大阪から母の許へ来ていたが、そこへ父貞蔵から、かねてからの縁談に、登美子の兄たちも賛成しているので、登美子にその旨申し聞かせよ、という火急の手紙が届いた。

この縁談は、旧小浜藩士佐伯成允から持ち込まれたもので、相手は登美子の生家の本家にあたる山川一郎家の養子駐七郎であつた。